

## 忘れられていく学校の記録

—昭和期の青年学校、定時制・通信制学校関係資料について

「鹿児島の近現代」教育研究センター 客員研究員 林 匡

### はじめに

昭和・平成を経た現今、県内諸学校の統合が進み、本来学校に残されている資料、学校関係者や地域のことを具体的に伝える情報が次第に失われていく。統合の場合も統合以前の学校への関心は次第に薄れ、記憶を呼び起こす機会も少ない。結果として関係資料は埋もれていく。しかし各地域の期待を受け密接な関わりを有していた学校関係資料には、そこに生きた人々のことを知りうる貴重なものが残されている。

筆者は以前勤務した鹿児島県立穎娃高等学校保管資料を基に、旧穎娃村立青年学校の、特に昭和10（1935）年の陸軍特別大演習の際に、県内に派遣された勅使奉迎に関わる地域の状況や太平洋戦争後の混乱期に

おける学校存続に尽力した人々の取組を紹介した（『鹿児島史学』第67号、2021）。併せて周年事業として刊行された記念誌収録記事から、例えば長らく苦勞した用水の安定確保にまつわる話や、太平洋戦争前後の勤労働員や被害状況、地域との結び付きの強さなどにも言及し、その上で学校保管文書の調査、事例報告の蓄積が必要ではないかと指摘した。

その後、筆者は縁あって県立明桜館高等学校勤務となったが、この明桜館高等学校の前身に県立鹿児島西高等学校（以後「西高」）があり、定時制夜間課程と昼間課程、通信課程を有し独自の教育活動を行っていた。明桜館高等学校保管資料から、かつて地域の青少年が就業の傍ら学んだ学校のこと、更に西高の高齢者学級活動の成果物に

ついて紹介したい。

### 鹿児島西高等学校の歴史と関係資料

同校の前身は昭和18（1943）年に設置された夜間中学校の県立履正中学校で、県立第一鹿児島中学校に併設された。昭和22年度の新学制実施の際に部制がとられ、以後複雑な変遷を辿る。旧履正中学校は定時制夜間課程として旧県立第一中学校から分離され、同年5月に「鹿児島県鹿児島高等学校第六部」と称し、旧県立第二高等女学校内に設置された。一方「鹿児島県鹿児島高等学校第五部」に通信教育部が併設され昭和23年6月に第五部通信教育部が発足する。昭和24年4月、鹿児島高等学校第三部・第五部・第六部が合併して鹿児島県鶴丸高等学校が発足し、定時制夜間部は昼間課程と分けられた。第五部通信教育部も鶴丸高等学校内に併置される。鶴丸高等学校夜間課程には、同25年4月に旧鹿児島市高等学校第四部普通科が合併され、当時鹿児島市内で唯一の公立夜間高等学校となる。

昭和39年4月に鶴丸高等学校が薬師町へ移転すると同時に、加治屋町の跡地に県立鹿児島中央高等学校が置かれ、定時制夜間課程は同校舎を併用し、鶴丸高等学校から分離して県立日新高等学校として独立、なお通信教育部は鶴丸高等学校とともに移転した。昭和41年11月、鹿児島市下伊敷町で鉄筋5階建ての新校舎建設が始まり同42年6月には定時制・通信教育モデル校として文部省から最初の指定を受けた。同43年3月に新校舎が完成し移転、4月1日付けで日新高等学校と鶴丸高等学校通信教育部が統合され、定時制昼間課程が加わり西高は開校する。西高は発足当時「昼間定時制、夜間定時制、通信制の三課程を有する定通教育センターの性格をもつ全国唯一の学校」として注目された（昭和44年度西高『学校要覧』）。

昭和48年度、定時制夜間課程に衛生看護科が併置され、50年度には定時制昼間課程の農業経営科が募集停止、通信制に農業経営科が設置された。51年度に全日制商業科が併置され定時制昼間課程の普通科と商業科が募集停止となる。56年度に定時制夜間課程の商業科も募集停止、63年度に定時制昼間課程の衛生看護科が募集停止、平成2（1990）年度に定時制昼間課程の閉課程記念式典が行われ、同課程は閉課となった。相当の位置付けをもって開設された同課程の閉課は、時代の変遷とともに就学の状況変化を背景とするものである。通信制も平成12年度に閉課程となり県立開陽高等学校に移管される。定時制夜間課程普通科・衛生看護科も同年度に募集停止、14年度に閉課程とされた。最後に残った全日制商業科が高校再編整備によって平成22年に生徒募集停止、県立甲陵高等学校と統合され県立明桜館高等学校となり、平成24年3月31日をもって閉校する。

現在、明桜館高等学校保管の西高関係資料中には、昭和26年度『鶴丸高等学校夜間課程学校概要』と、昭和27年9月付け『定時制夜間課程鹿児島県（県）鶴丸高等学校一覧』以下30年度までの『学校一覧』、31年度から35年度までの『定時制夜間課程鹿児島県鶴丸高等学校一覧』があり、昭和36年6月付け『鹿児島県立鶴丸高等学校一覧夜間課程』、37年度と38年度の各『学校要覧 鹿児島県立鶴丸高等学校夜間課程』、38年度『学校要覧抄 鹿児島県立鶴丸高等学校夜間課程』と続く。次に、昭和39年5月1日現在の『鹿児島県立日新高等学校の概況』、昭和40年度から42年度の各『学校要覧 鹿児島県立日新高等学校』がある。西高開設以後は昭和43年度以降平成23年度までの各年度『学校要覧』と平成24年3月2日付け『第34回卒業式・閉校式』パンフレットがあり、これらの中には、昭和23年度から三年間の取

組を述べる「夜間課程小史」や日新高等学校の校名由来なども記されていた。

この他注目される冊子2冊がある。一冊目は『大正三年1914 桜島大爆発の思出集』（鹿児島西高令者学級、1972）、二冊目は『明治大正学童期の思出集No.2』（鹿児島西高令者学級、1974）である。寄稿された方々は、生年の判明する方で明治24（1891）年から大正3（1914）年までであり、当時既に60～80歳初めである。『大正三年1914 桜島大爆発の思出集』全32編には爆発当時の場所、在籍した学校と学年や地域、爆発後の避難行動や当時の人々の状況などが具体的に記載されている。爆発当時、鹿児島市内や周辺（旧伊敷村など）での経験談が多いが、他に旧日置郡阿多村や川辺郡東加世田村、揖宿郡瀬々串、始良郡溝辺町や福山町、曾於郡志布志町その他県外でのことも記されている。また『明治大正学童期の思出集No.2』は12名による、鹿児島市など明治後期・大正期から昭和にかけての生活環境や風習、男尊女卑、女子教育や学校・寄宿舎の生活、軍隊・軍人、引揚げの経験など多彩な内容が記録されており、これらも機会を得て再録・紹介できればと考えている。

## 結びに

薩摩藩研究の大家であった原口虎雄氏は、「私をはぐくみ、淳々と藩政の昔を教えてくれた」古老について、「藩政末期から明治初年にかけて生活してきた古老たちは、気がつくともはや一人もおられない。このままでは私とともに藩政期の『書かれざる記録』は湮滅するかもしれないと、いまさらに責任の重さを感じる。」としたためられた（「薩藩史事始～妄語抄（一）」（『月報3 旧記雑録後編1付録』鹿児島県維新史料編さん所、1981）。原口氏は「古老たちからの聞き書の豊富さ、貴重さ」の重要性と後世への継承を訴えられていたが、これは今や明治・大正・昭和初期の『書かれざる記録』にも当てはまる。学校保管資料（学校日誌、学校沿革史、要覧など）とともに、周年事業により編纂された記念誌、又は学校の教育活動を通してまとめられた諸記録にも、その時代と地域を窺い知ることができる歴史的事象や生活に関わる資料が残されている。現在、県内市町における調査等の取組も一部進められているが、学校の統廃合、広域化が進む中で、各地域に立脚し存在した学校保管資料も歴史資料として重要であり、その保存活用は今後の課題と考えられる。